

新春講演会

開催日 : 平成27年1月24日(土)

14:00~15:50

場所 : 奈良市中部公民館 第4講座室

講師 : 田中 克 京都大学名誉教授

・(公財)国際高等研究所リサーチフェロー

・NPO法人「森は海の恋人」理事

・(気仙沼)舞根森里海研究所長 他

演題 : 「森と里と海のつながり」

— 人と自然を紡ぎ、持続可能社会を見据える —

参加者 : 61名(会員47名、一般14名)

田中先生が京都大学での稚魚の研究の中から生み出された「森里海連環学」の理念を基に自ら活動されている「東日本大震災後の三陸海岸の舞根(もうね)湾地区の再生」や「瀕死の海、有明海の再生」のお話を伺いました。森、里、海のつながりの大切さを痛感した講演会でした。

(講演要旨)

1. 気仙沼舞根湾再生への取り組み

宮城県気仙沼市にて牡蠣養殖業を営む畠山重篤氏は、「豊かな海を取り戻すには、上流の森を守ることが大切である。」ことに気づかれ、1989年「牡蠣の森を慕う会」結成を経て、2009年NPO法人「森は海の恋人」を立ち上げました。

田中先生は、この「森は海の恋人」の理事として、地元の漁業者やボランティアと一体となって舞根湾の再生に活動されています。

(1) 「気仙沼舞根湾調査」の立ち上げと展開

・2011年5月から、巨大地震や津波が沿岸生態系に及ぼした影響と回復の過程に関する調査を開始。「森は海の恋人」を支援する全国の研究者、ボランティア団体の参加のもと、その調査回数は23回に及んでいる。その結果、海の中の自然は着実に回復していることがわかってきており、地元の漁民に明るい希望を与えています。

①津波により捕食者がいなくなりすべての生き物に餌がいきわたった結果、新たな生き物社会が再

構築されている。(キヌバリ稚魚の著しい増加)

②2014年7月、舞根湾の岸辺の生き物の象徴メバルが震災後3年を経過して帰ってきた。

③舞根湾奥には、地盤沈下で半分海水、半分真水の湿地が生じ、蘇った干潟ではアサリの稚貝が大量に発生着底した。

(2) 自然のつながりを断つ「防潮堤」への対応
舞根地区では、住居は高台へ移転し、元の住居跡は湿地として残し、「防潮堤」は不要との結論を出しました。行政にも働きかけ、三陸では唯一防潮堤を作らない地域となっています。

(3) ウナギ復活作戦「ウナギの里づくり」開始
舞根湾奥のよみがえった湿地や干潟に多様な生き物が出現しています。舞根湾奥に湿地や干潟ができれば、ウナギやアサリの生息場所となり、絶滅の危機に瀕している生物の保全につながります。

(4) 「舞根森里海研究所」の設立

昨年2014年4月に、三陸海岸の森里海のつながりに関する研究・教育の拠点として「舞根森里海研究所」が気仙沼市舞根地区にオープンしました。

田中先生が初代所長に就任され、国内外の研究者や子どもの教育事業などに幅広く使われることが期待されています。

2 「有明海の再生」への取り組み

森と海のつながりが断ち切れ、アサリの収穫量も激減している「瀕死の海、有明海の再生」も、私たちの価値観を「森里海連環」の方向に変えることから解決の道筋が見えてくると提言されて



います。

(寺田 孝)